

[課程－2]

審査の結果の要旨

氏名 力武 諒子

本研究は、院内がん登録を用いて、頭頸部がんにおける3つの clinical question について、我が国の頭頸部がん診療の現況を明らかにした。各研究の結果は下記の通りである。

研究1：頭頸部表在がんの現況

院内がん登録を用いて、頭頸部表在がんについての現況を、食道表在がんと比較して明らかにした。頭頸部表在がん(Tis)はT1-4と比べて、やや高齢、男性に多く、後壁に多かった。また、上部消化管内視鏡による年間治療数が多い施設では、咽頭Tis症例の割合が高い傾向が見られた。Tisが咽頭がんでは全体の5.3%だが、食道がんでは12%と多かった。食道がん症例数が多い施設では咽頭Tis症例の割合が高い傾向が見られた。施設毎の咽頭がん症例数におけるTis症例の割合は、その施設での食道がん年間症例数と、弱いものの相関を認めた。

研究2：上咽頭がんにおける強度変調放射線治療(IMRT)の施行状況

院内がん登録とDPCデータベースを用いて、我が国での頭頸部がん、とりわけ上咽頭がんにおけるIMRT施行の現況について、前立腺がんと比較して明らかにした。頭頸部がん全部位で放射線治療を施行されたうちIMRT施行例は27%で、上咽頭がんが最も施行割合が高く69%であった。前立腺がんのIMRT施行割合は84%であった。前立腺がんと上咽頭がんに対するIMRT施行割合の相関は認めなかった。各施設における放射線治療専門職(医学物理士と放射線治療専門医)数と上咽頭がんに対するIMRT施行割合、各施設における全がんの年間放射線治療数と上咽頭がんに対するIMRT施行割合、前立腺がんにおいても、いずれの間での相関は認めなかった。我が国でのIMRT施行率は海外と比較しても低い現状が明らかになった。

研究3：頭頸部がん専門医制度が定める指定研修施設における頭頸部がん治療の現況

院内がん登録を用いて、指定研修施設と非指定研修施設での頭頸部がん治療症例数、患者背景とその治療内容の差異、予後、地域分布について明らかにした。指定研修施設で全体の63.6%が治療されていた。進行例や若年齢の治療難易度が高い症例で指定研修施設での治療割合が高かった。下咽頭、上咽頭、中咽頭で指定研修施設での治療割合が高かった。聴器、喉頭、大唾液腺では指定研修施設での治療割合が低かった。治療選択の多様性、治療の専門性が高い症例で、早期から指定研修施設での治療が選択されていた。指定研修施設では診療ガイドラインに遵守した標準治療が多く施行されていた。都道府県別での指定研修施設での治療割合は、都道府県によってばらつきが大きかった。生存率は、頭頸部が

ん全体では指定研修施設の方が生存率は高かった。部位別では、上・中・下咽頭にて全 Stage で指定研修施設において有意に生存率が高かった。喉頭および鼻・副鼻腔の Stage I/II、大唾液腺がんおよび聴器がんの全 Stage で指定/非指定研修施設での生存率の有意な差は認めなかった。指定研修施設では標準治療が多く施行されており、予後も良好であった。

以上の 3 つの研究は、全国規模の実臨床の現状に基づいたヘルスサービスリサーチの具体例であり、頭頸部がんのように症例数が単施設で集積出来ない症例についてこそ、積極的に進める必要がある。院内がん登録を使用し、統計解析を適切に行うことで、頭頸部がんの診断、治療、医療提供体制に関わる諸問題についての我が国の現状を示すことができた。大規模データを用いた頭頸部がんの検討はまだ黎明期の段階にあり、本研究は、その方向性を示す上でも非常に有益である。

よって本論文は博士（医学）の学位請求論文として合格と認められる。